



「旅立ちの地」エッセイコンテスト

大賞

## 旅立ちの約束

後藤 里奈 東京都

彼女との出会いは、高校一年の春だった。内気な私に、度々話しかけてくれたことがきっかけだった。正義感が強く行動的な彼女と何事もマイペースな私。性格の正反対な私たちは、だからこそなのかすぐに打ち解け、良きライバルであり親友となった。私にとって、互いの欠点も遠慮なく言い合えるような真の友人は彼女だけだろう。やがて、自分の進路について真剣に考えるようになったある時、私はなりたいた職業をすべて紙に書き出してみた。そして、何が一番自分に向いていると思うか。と彼女に尋ねた。すると彼女は「教師」と即答した。「芯が強く、常に冷静なところが向いている」と言ってくれたのだ。実は、彼女の夢も小学校の教師になること。誰にでも優しく面倒見の良い彼女にはびつたりの職業だと思っただ。信頼する友の言葉に背中を押され、私たちは同じ夢に向かって努力を続けた。

それから五年後。夢はようやく実現の時を迎える。彼女は地元岩手の公立小学校へ、私は都内の私立高校へ就職が決まったのだ。上京の日、私たちは「早く一人前の教師になって、また会おう」と約束し、互いの旅立ちを祝った。しかし、忘れもしないその年の三月十一日。その約束は果たされぬまま、友はさらに遠い場所へと旅立ってしまった。

その日、私は勤務の決まった学校で研修を受けていた。一方彼女は、地元の学童でボランティアをしていた。そこへ突如襲った未曾有の大地震。希望に満ちた春が、悪夢に変わった瞬間である。沿岸部に位置する私たちの地元では津波の恐れがあったため、すぐに避難指示が出された。町の人々も「早く逃げろ」と声をかけ合った。だが、外で児童と遊んでいた彼女はその声に一切耳を傾けることなく、最後まで子供たちの誘導に当たっていたそう。そして無事に全員を避難させた直後、津波に襲われた。彼女の無念や悔しさを思うと胸が張り裂けそうになり、私はしばらく深い悲しみから立ち直れずにいた。人一倍責任感の強い彼女は、自分の命よりも目の前の子供たちを助けることを迷わず優先したのだろう。苦楽を共にし、いつも励まし合ってきた唯一無二の親友は、もうこの世にいない。けれども、友は悲しみに暮れていた私の背中を

もう一度押ししてくれた。ある時、私はこれまで彼女から貰った手紙の数々を読み返していた。すると言葉の端々に表れている強い意志、教職への熱い想いに触れ、はっとさせられた。私はまだ、あの旅立ちの日に交わした彼女との約束を果たしていない。遺された者として、共に同じ夢を追いかけた同志として、私には「立派な教師になる」という約束を生涯かけて守っていく使命がある。自然と力が湧き、私は再び決意した。

あの旅立ちから十三年。私は曲がりなりにもまだ教師を続けている。壁に突き当たり挫折そうになる度、友との約束を思い出し、自分自身を奮い立たせている。

故郷の津波到達地点には今、たくさん桜の木が植えられている。二度と同じ被害を繰り返してはならないという教訓と、犠牲者の鎮魂のためだ。復興のシンボルでもあるこの桜並木は、私たちを静かに見守ってくれている。あの日彼女が救った子供たちは、去年高校卒業の年を迎えた。命懸けで自分たちを守ってくれた彼女のことを、彼らは決して忘れないだろう。憧れの教壇に立つことは叶わなかったが、彼女の魂は幽明境を異にしてお、確かに息づいている。

未来へと旅立つ子供たちのため、奮闘する日々はまだまだ続く。